

## 黒の風景

### 根来 滯子

私は70歳。朽ちかけた廃屋に住み、雨戸をたたき風雨の音におびえ、明日への展望もなく、一人呻吟の世界に漂っていた。私の幻想は、はるか彼方、ヴェノスアイレスの港町に訪れる黒い帆船を待っていた。禍々しく懐かしい帆船を。

### タンゴ

肩までかかる灰色のストレートの髪を輪ゴムで後ろに束ね、白く乾いた表情のない顔に真っ赤に塗られた唇、青く縁どられた目の周りには、隠しようもない漣のような小皺が浮き出ている。黒地に深紅の薔薇をあしらったノースリーブのロングドレスから覗く筋張った鎖骨。7センチのヒールのダンスシューズは、ややもすれば重心を失いそうになる身体を懸命に支えている。思いつきり長く垂れ下がった金色のヘアリング。どんなドレスを着ても隠しようのないぜい肉で覆われ

ているアンバランスな私の姿。でも私は背筋を伸ばし、ホテルのほの暗いロビーの照明の中をダンス会場に向かう。

私が長年通って練習を重ねているダンス教室の、年に一度のホテルでのダンスパーティーなのだ。会場はもつと照明を落としている。ミラーボールの鋭い光が稲妻のように天井を交差する。あらゆる年齢の人がコンプレックスを抱かずに過ごせるような照明はホテルの「おもてなし」の表れであろう。

会場には8人用の円形のテーブルが14、5卓ほど、絨毯の上にそだけしつらえたダンスを踊るための板敷きのフロアを囲んで並んでいる。私の名前で指定されたテーブルを探してほっと一息つく。

彼は着慣れないタキシードに身を包み、そわそわして私の目の前にいる。

「音程を外さないように気をつけてね」と、念をおす。「大丈夫だよ、あれほど練習をしたんだから」

彼はそう言って胸を張った。カップルを組んで5年、ソシアルダンスの10種目のなかでタンゴだけを踊るリーダーとして彼と一緒にになり、今宵のパーティーでのデモンストラレーションに参加するのだ。

彼は一流大学を卒業し、有名企業に就職して、将来

を囑望され、本人も野心満々だったが、不遇に終わった。能力というよりも、人間関係で人望を得ることができず、節操のない性格によるのでは私は思っている。本社から東北地方の支社に飛ばされたとき、社会的地位への望みは絶たれ、無情な人生の総括を知った。平凡に定年退職をし、夫の出世だけを生きがいにして彼の放埒を許してきた妻から疎まれ、思っても見なかった不毛の老後を送ることになった。現役時代は北アルプス連峰を踏破するほどの山男だったし、ゴルフに明け暮れる日々だったので、老後に社交ダンスにはまると、ありえないことに思えたが、受け入れがたい屈辱から自暴自棄になっていたそのエネルギーが、当時評判になっていた社交ダンス映画に刺激され、私が所属するダンス教室に入会してきて共にレッスンに励んできた。音感があるわけでもなく、しなやかな肉体なども持ち合わせていなかったが、ストイックでエレガントなワルツやフォックストロットなどと違って、スターカットでリズムを刻むタンゴの動きには、力強さと同時に、一種捨て鉢な激しさが魅力であり、彼が内部に抱えている破壊願望と私のそれが一致したのだ。年齢による全身の衰退は彼も私も同じで、ダンスに必要な肉体のバネがなくなっていることも、「思いいれ」

だけではどうにもならないハンディも、とづくに自覚していた。二人に明日はない。もうこれが最後のデモンストラーションになると決めていた。曲はタンゴの名曲、アストル・ピアソラのダンス用に編曲した「リベルタンゴ」。

大広間にそれぞれのテーブルに並ぶ150人ほどの、ダンス仲間の観客のまえで彼とリベルタンゴを踊る。闇の中に大きな円を描いて揺れる黄色いライトの光を満身に浴び、私と彼はフロアの中心に出ていく。やがて激しいバンドネオンの響きが室内に響いた。無言で近づき、私は右手をあげて彼の左手とあわせ、左手を彼の肩に軽く置き、ダンスのホールドを作った。二小節、三小節と進むうちに男性のリードに従って二人の足が床を蹴って跳躍した。コンタクトはみぞおちのあたりがかすかに触れるだけ、それだけで彼が伝えようとする複雑なステップもバリエーションも、彼の送るシグナルのすべてが伝わってきて、無意識に彼を受け入れ、一体となって溶け合うのだ。

「世の中には踊る人と踊らない人と二種類しかない」とは、作家中山可穂の小説『サイゴン・タンゴ・カフェ』のなかの一節だ。たった一度踊ったために人

生を棒に振ってしまった人たちの人生の末路を描いた小説だ。私は踊ってしまった。そして彼も。

彼の内腿と私のそれが激しく交差し、ぶつかり合い、やがて一つの軸となる。私は彼の腕の中でのけぞり、覆いかぶさるように近づく彼をはねのけ、追いかけてくる彼の両腕のなかに捉えられ、高々とリフトされる。2回転、そして3回転、目まぐるしく回転する天井を見つめながら、私の身体全体が彼の意のままになって宙を舞う。踊ることではか得られないめくるめくエクスタシーがそこにある。共有してしまった私達はタンゴという音楽に流れている狂熱に焼かれ、落ちていく。

### 瀬音

墨絵のような山々の稜線を藍色の空に浮かべて、谷間の道はひっそりと閉ざされていた。舗装道路が尽き、小石だらけの土埃にまみれた、これ以上は前に進めないという行き止まりの路肩に車を乗りあげて二人は降りた。雨粒を含んだ風が山の大気を運んできた。更に奥の方へと、つま先上がり坂道の歩き始める。これから先は未舗装の登山道路である。この溪谷のような場所に目的があつて来たのではない。ただ車を走

らせ、いつの間にか郊外に出てきただけの行き当たりばつたりの道なのだ。ゆつくりと歩を進める。私は水玉模様のワンピース、彼は白っぽいポロシャツにグレイのズボン。街中を散歩する服装だ。登山の意志はない。

「何処へいこうか」と、私はいう。

「もう少し先に行つて休もうか」彼はけだるく答える。夏の陽光はあつけなく消え、わずかに山の頂にそれらしい色彩をとどめているだけだ。高みへと上がつていく道とはうらはらに、谷間の川へと降りていく細い石段がある。覗き込むと谷あいをながれる瀬音が、あたりの静寂を乱していた。

「河原に降りて休もう」思いついたように彼はそう言つて雑草の絡みつく不揃いな石段を一段ずつ下りて行つた。逡巡している私の手を取つて「大丈夫だよ、僕にしつかりつかまつて」と頼もしくフォローする。私はしつかりと彼の腕にすがり、一歩ずつ慎重に下りて行つた。

意外に広い河原は平たい小石に覆われ、所々に月見草が咲いている。その黄色い花びらがまさに開こうとしている黄昏の時期であつた。澄み切つた浅瀬のせせらぎがすぐ近くで聞こえてくる。流れに沿うように彼

はハンカチを敷いて私を座らせた。二人並んで座った。話すことはない。昨日も一昨日も一緒だったから話すことは何もない。

「疲れたわ」

私はそのまますると横向きに寝そべった。小石が肩や背中、首筋に触れて痛い。思わず両足を縮めて目を閉じる。そんな私を見つめていたが、やがて彼も覆いかぶさるように足を放り出して横になった。二人は横向きに並んで寝転ろび、キスをした。彼はしっかりと私の腰を抱いて自分の方に引き寄せた。

「誰かに見られたらどうするの」

「こんな時間に誰も通りはしないよ。もう山に登る人なんかいないんだから」

それはそうだ。しばらくじっとして水の流れる単調な音を聞きながら目を閉じた。鳥も蝉も鳴かなかった。

次第に山間は墨の色を濃くして一筋、オレンジ色が稜線をかすめて消えた。ややあつて私はふと目を開けて彼を見た。道路側に向かって寝そべっている彼が遠くを見るようなまなざしで手を振っている。大きく腕を振り回し何かに向かって合図をしているように笑みを浮かべながら手を振り続けている。

「どうしたの？」

私は、ゆっくりと首をまわして振り返り、彼が手を振っているその先を見上げた。

山道の道路沿いに五、六人のリュックサックを背負った男女が一列に並んで、河原で抱き合い、寝転んでいる私たちを見下ろして立っていた。私はうろたえて彼の胸に顔を埋めた。

「大丈夫だよ、元気だよ」

私も、彼らの存在に気付いたと知った彼は口に手を当て大きな声で話しかける。

「もう暗くなりますよう、帰った方がいいですよ」

山登りの帰途であろうか、彼らも大声で答え、手を振り返した。

「心中かと思いましたがよう」

一人が叫んだ。

「本当に二人とも身動きしないんだから、変だとおもいましたよう」

大きな声で話しながら、登山者は私と彼の反応に安心したようにのろのろと歩き始めた。

「夕涼みだよ」

木立にきえていく彼らを追いかけるように大きな声で叫ぶ。そして小さく呟いた。

「心中か——それもいいかな」

妻に愛されない男と、夫を失った女には帰る家はない。それでも繰り広げる日々は底なしの倦怠である。

昭和初期、実業家であり歌人でもあった川田順が自分の晩年の恋を「老いらくの恋」という言葉で歌に詠み、世間を騒がせた

——墓場に近き老いらくの

我に怖るる何物もなし

高齢者同士の心中であればそんな表現で少しは人のうわさになるかもしれない。愛を全うして情熱的な人生をわが物にした歌人だったが、私と彼はただ流されていくだけ。タンゴを踊らない未来に彼はいない。

深い疲れにまどろんで、私は再び石の上に横たわり目を閉じた。彼も並んで同じ姿勢になった。夜が深くなっていた。

(2021年 9月)